

お金に限らず、人は得る（もらう）時はうれしいものですが、失う（払う）時はなかなか喜べないものでしょう。

しかし、純粋倫理を提唱した丸山敏雄は次のように述べています。

「し」（死）というのは、顕幽両界の境、切れ目、をいうのであり、「生」（うまれる）ということとは、幽顕両界のつなぎめをいうので、これは駅の改札口のようなもので、出入りの相違、方向のちがいがあただけで、同じことである。同じことであるから、同じ感情で、これに向うのがほんとうである。生れることが喜びであつたら、死ぬることが又同じくよろこびでなければならぬ。朝起きることが喜びである如く、夜ねるのは嬉しい。金銭の入るときが元気がよかつたら、金銭が出て行く時も愉快で上きげんでなくてはならぬ。貯金がうれしくて、借金がうれしくない道理がない。

『万人幸福の栞』『第三 真人生の成就』

主題は生死に関するものであり、ここでは生死や起床就床、お金の出入りについて触れています。出ては入る、つまり「発顕還元の原理」において、その方向性は逆であつても現象としてはどちらも必要必然であり、同じように受け止めるのが人としての倫理（みち）である、という意味です。その中で、身近な存在であるお金について考えてみましょう。商売において、お客様からお金を頂くことに喜びを見出さない人はいないはずで、一方で、お金を支払う時に同じように喜んでいくでしょうか。



請求書に感謝した時 人も物もお金も動き出す

造園業を営むMさんは、経営者としての働きに加え、倫理法人会やPTAなど様々な活動に取り組んでいましたが、多忙のあまり仕事上のミスが続いている状態でした。そこで、倫理指導を受けたところ、講師から、「請求書に感謝していますか」と問われたのです。Mさんは、取引先からの仕入れのおかげで仕事ができることは分かっていたが、資金繰りのことが頭をよぎり、感謝できていないことに気づきました。

以来、全ての請求書を感謝の気持ちを含めて丁寧に確認し、資金繰りと照らし合わせながら早めに支払うように心がけました。支払いがしつかりできるようになると、自社の請求についても、「可能であれば早めにいただきたい」と依頼できるようになりました。すると、快く対応してくれる会社も出てきて、徐々に資金繰りが好転していったのです。次第に社内雰囲気も明るくなり、従業員のモチベーションも向上していききました。さらに、従業員も各担当先に早めの支払いをお願いしてくれるようになり、資金繰りが益々改善していききました。

Mさん自身も、様々な出来事に対し、一つひとつ丁寧に対処していったところ、業務の効率化が図られ、明らかにミスも低減し、日常生活でも余裕をもって過ごすことができるようになりました。

支払いがあつてこそ仕事ができるという当たり前のことを改めて自覚し、感謝をもって支払うことで、金銭がより良く働いてくれるのです。